

人の生きる現場の記録と「共に生きるかたち」の語り

—どのように語り、記録するのかの視点から—

企 画：	崎原秀樹	(鹿児島国際大学福祉社会学部)
司 会：	工藤芳幸	(大阪保健医療大学言語聴覚専攻科)
話題提供者：	石川由美子	(聖学院大学人間福祉学部)
話題提供者：	崎原秀樹	(鹿児島国際大学福祉社会学部)
指定討論者：	浜田寿美男	(奈良女子大学名誉教授)

【企画主旨】

人は人を含む状況の中に生まれ、その状況と手持ちの力でやりとりして生きている。治療や教育は生活の一部として登場する。企画者は、話題提供者と共に、様々な現場で会う子どもや大人が、他者や状況と「共に生きるかたち」をどのようにとらえ、かかわったよいか模索してきた。毎回、浜田寿美男氏に、発達心理学のもう一つの方向、人の『共に生きるかたち』の視点から指定討論をお願いし、様々な話題提供者と議論を深めてきた(発達心理学会自主シンポ 2004～2012)。

改めて実証的研究の枠組と、人が生きている現実を捉える枠組の乖離に気付かされた。第9回(2012)では研究の枠組みの外に行き放しにならずに、これまでの試みを整理する方向を模索した。そして、現場でのやりとりやかかわりを、どのように語るか、さらには記録するか？ある程度共有可能な視点や内容があるのかについて議論を深めてきた(特殊教育学会自主シンポジウム 2012)。

「関係の中での生きにくさ」は、互いの「手持ちの力」でどのようにやりとりされ、状況が切り開かれてきたのか。企画者、司会、話題提供者、指定討論者は、表現こそ違おうがおおよそ、このような地平から現実を捉え返し、各自の持ち場で仕事と共に生活を続けている。

今回、石川は、事例の当事者達が「共に生きるかたち」をどのように生きているか。障がいのある子どもと母親の絵本場面での記録を、「生きあう中での記録」の観点から読み直す話題提供をする。崎原は、人の「共に生きるかたち」の視点からの実習体験の語りを通じた試みを話題提供する。浜田には、話題提供を掘下げるために、事例の主人公が人を含む状況をどのようにとらえ、生きているのかを描き、周辺の者がそれにどのように関わられるか、主観の心理学の視点から指定討論をお願いする。

【話題提供 絵本の読みあい活動の過程を「生きあう」記録の観点から捉えなおす試み】石川由美子

子どもは親を選べない、という。しかし、親もまた子どもを選べない、のではないか。障がいがある我が子と向き合い、他の子どもとは異なるゆっくりとしたこどもの育ちを親は、はじめから理解し、納得し、受け止めているわけではないだろう。その過程(生活)の中で子どもに向けられるまなざしは、声はどのようなものなのであろうか。

子どももまた、その過程(生活)の中で親と生きあい、自身の欲求と課せられた要求の中で葛藤するのであろうと思う。そのときに子どもが親(他者)に向けるまなざしや振る舞いは、如何なるものだろうか。そのまなざしや振る舞いからは、子どもが今、何を感じ、何を聴いているのか、が読み取れるだろうか。その読み取りは、子ども自身が今という時間を土台に描き出す明日への「希望」の道筋に、添うものとしてあることが可能だろうか。人が共に生きる中での「記録とは何か」を、捉えなおしてみると、そんなことが頭に浮かんで離れない。

子どもの発達という観点から、人と人の中で機能するモノの研究を「絵本」という媒体を通して行ってきた。「絵本という媒体を使ってください」と依頼した瞬間から、その場所は、親にも子どもにも一定の状況が課せられた空間となるのである。今回は、障がいのある子どもと母親の記録から、課せられた状況の中で、母親は如何にわが子と絵本を介して向き合おうとするのか、その親の振る舞いを子どもは、どのように受け止め、自分の欲求と要求の間の葛藤に向き合うのか、その先に、見えるものは子どもにとって「発達」といえるものか等について、「生きあう中での記録」の観点から読み直してみたいと考えている。

【話題提供 体験をどのように語り、書くか—ソーシャルワーク演習Ⅲでの試み(2012)】崎原秀樹

社会福祉現場実習後、体験を、座学とのつながりの中で深めるための演習教育を担当している。

まず本人が印象に残っていることから話させ、次に担当者がその学生の話聞き、必要と思われる視点から質問をする中で話の輪郭や筋道が見えるようにする作業を行った。上手く話せないときや話したくない内容は追及しない。その後、一人の学生が話したことを、他の学生が質問して担当者と同じ作業を行わせた。さらに、原稿に書かせ報告させ質疑応答を繰り返す中で作品としてまとめさせた。

一連の作業自体が面接、つまり互いに体験したことや聞きたいことをどのように話したり書か、逆にそれを引き出すにはどのように聞いたり反応すればよいかの試行錯誤になる。実際、他者の体験を聞くことも含めて体験をどのように振り返り、次に何をしたらよいかを発見する作業につながったようである。

このような実習後の演習教育を行うに当たって、人の営みをどのように捉え、どのように関わるのかを検討する際の原点とは何かと考えた。体験したことを朝起きてから夜寝るまでの出来事として、聞く人や読む人もその場に参加しているかのように感じられるように話せること、書けることだと考えて現場で働いてきた。社会福祉現場での日常、そこで出会う人の他の場面での生活の積み重ねも含めて実習体験をどのように表現するかからすべては始まると考え、前述の試みを続けている。

【指定討論 「共に」の位置から「生きるかたち」を記述する】

浜田寿美男

私がこれまで人の「生き方」ではなく、その「生きるかたち」という表現にこだわってきたのは、人の生の「選べなさ」をまずは正面から見定めておきたいとの思いからである。誰もが否応なく与えられ、自分では左右できない条件を背負い、それを引き受けて生きている。もちろん、そこから自分なりの希望を明日に向けて投げかけ、ささやかであれ自分なりに「選び」「克ち得た」ものもあるはずだし、そのことの意味を否定するわけではない。しかし、従来の発達論が能力で切り拓く豊かな世界を謳うなか、与えられた現実を引き受ける受動性が不当に貶められてきたことを思うとき、選び広げる「生き方」ではなく、引き受けて作る「生きるかたち」にやはりこだわっておきたい思いが強い。

その「生きるかたち」を記述する。それはただ外から観察できる外形的な「かたち」を写し取ることではない。「生きるかたち」がそれとして見えるのは、あくまで与えられた条件を「渦中で」生きる主体の位置からであり、あるいはその主体に添って共に生きるもう一人の主体の位置からでしかない。あえて言えば「生きるかたち」は「共に生きるかたち」を通してしか見ることができないということかもしれない。しかしここでいう「共に」は必ずしもその時間・空間を共にすることではない。私がここ30年にわたって関わっている供述分析の世界なども、手元に残された古い記録資料にどっぷり浸かり込んで、そこに記録された主体の痕跡をその主体の位置から捉えなおす作業であり、そこに「共に」があるとすれば、その「共に」はけっして直接的な時空の共有ではない。それでもそこに「共に生きるかたち」が成り立つ世界がある。

報告された現場の記録から「共に生きるかたち」の記述可能性について考えたい。

【参加者を交えた討論に向けて一当面する課題をどのように語り合ったらよいのか】

誰もが、身体の内側から外に向かって開かれた舞台をジタバタと生きる主人公である。他方でそこそ幽体離脱して、自分の登場する舞台を上空から見ると異なった風景に見える。互いに、後者の上空の視点から状況の中での相手の姿をとらえることはできても、相手の身体の内側から外側に向かって開かれた舞台の視点から相手を理解することは困難である。しかし、身体と現代社会の構造の相互作用により得られる認識と行動の枠組みを通してなら、他者が、身体の内側から外に向かい開かれた舞台を生きるかたちを、ある程度推測できるのではないか？

今回の題材は、いずれも記録と語り、そして実際に生きた記憶について、「共に生きるかたち」をテーマにして記録してきたわけではない。改めて、「チョキン、チョキンと途切れた線を、観客の視点でどれだけつなぎあわせ、面としての「かたち」になしうるのか？（石川）」と問いたい。

人の「共に生きるかたち」にかかわる記録は、多様な視点からの関係や出来事の蓄積から始め、次に必要な事柄を読み取り、それにかかわり、さらに記録を重ねる、つまり現実との間で開かれた営みにならざるを得ない。オリバー・サックスの「妻を帽子と間違えた男」「火星の人類学者」などの作品は、このような視点から描かれた登場人物の物語と理解すると、さらに親しみやすくなった。

細かいところでは目指すことが異なる4人にとって、どのような土俵を作ったら切磋琢磨できる場になるかも含めて検討したい。対面や横並びという「雑談」の難しい状況で、討論への活発な参加を期待する。